集団の凝集力再生の思想的課題（1）

窪　田　　忍*

The Requirement to Re-establish the Spirit of Group Cohesiveness in Japan

Shinobu Kubota

要　　旨　本論は国家，社会，集団およびそれを構成する個人にかかわる諸問題を「凝集力」という概念を中心に考察したものである。90年代から顕著になってきた日本社会の低迷，停滞そして崩壊とも形容される社会状況を背景に，その中にあって個人の人格および集団が機能し成立する要件を「凝集力」としてとらえ，その再生は如何なる精神的思考的，即ちいわゆる思想的基盤の上に据えるべきであるか，またどのような方向性を持ち得るかを討論している。

本稿はその第１部として「凝集力」およびその思想的基盤は「徳」の問題に大きく関わるものであるが，それは単に行儀作法やマナーといった道徳レベルの問題ではなく，それらを規定し方向づけるものとしての，より根底にあるものとしての「徳」の問題であること，しかしそれは儒教的な「徳」に回帰すべきものではなく，開放的な性格を持つ新たな日本的なものとしてものとして基礎づけられるべきものであること，そしてそれは「和魂漢才」「和魂洋才」の精神的伝統を継承し，新な時代を見据えた上での「和魂」の探求と再建にあることを述べている。

キーワード　集団　　凝集力　　儒教

はじめに

不断に自分を見つめ直すことを通じて人は成長して行く。そのためにはまず見つめられる自分がなければならないし，また同時に自分を見つめる冷静な目がなければならない。それは我々が所属する各種の集団についてもいえることである。今，我々は世の中が大きく変わりつつあると感じ，また変わらねばこの先やって行けないと痛切に感じさせられている時代に生きているのではないだろうか。そうはいっても，この先には夢や希望が満ちあふれており，先を競うのが楽しいというわけでもなさそうである。それは迂闊にも今までそれなりに立っていられたと思われていた地面が急速に崩れ去って行くような奇妙な感覚と形容し難い一種の閉塞感に満ちた空気の中で，半覚半酔の様にすっきりしない視界に何やら得体の知れないものが無数に蠢いているような感じを伴ったものである。

では，昨今の我々は日本という国家・社会をどのようにとらえているのだろうか。我々はただ

* 本学准教授　中国思想史

そこに寄宿しているだけの存在なのか。ここは税金という家賃あるいは管理費を納めて居住しているだけの所なのか。明治維新から140年，未曾有の敗戦から62年，そういえば遠い昔にその様なことがあった，あるいはあったらしいで済む場所なのか。そもそも我々は何者なのか。

自分を見つめ直すということが，このように自問をし，そしてそれに自答して行くことを通してなされるものであれば，我々にとってそれは一つの義務であろう。

日本が国家としての体をなしていないという声がある。また国家として機能不全に陥っているという声もある。保険医療問題，年金問題，防衛問題，外交問題，教育問題等々，いずれも「崩壊」と形容されている。国家レベルのものだけでなく，民間のレベルでも様々な「崩壊」がいわれているし，個人のレベルにおいても人格の「崩壊」がいわれている。まさに長年のツケが一気に噴出してきたかの感がある。

本稿ではこの各種集団の「崩壊」の危機とされるものを「凝集力」の視座から捉えるとともにこれを「再生」のための鍵と位置づけ，我々がこの問題を解いて行くには集団を構成する「個」としてどのような可能性を開拓すべきか，その方向を試探する。

1．集団を維持する内的かつ意識的な力＝凝集力

人類は人という個体が多数集まることによって構成されているわけだが，しかし，人々は複数の個体がただ複数個いるというだけの単なる「群れ」として存在しているのではなく，一般には大小および上位・下位と様々な次元での複数の集団に複合的に所属して存在している。そしてこれを逆の方向から見れば，それぞれの集団も純然と個別に存在しているのではなく，その構成員を介してのこれまた相互に複合的なつながりを持っている。

個体としての人が一つの物体として成り立っているのは，つまり放置すれば徐々に多数の分子状の塊へと分解してしまうものでなく常に一定の形を維持できているのは，そこには各分子をただ単に寄せ集めているだけの総合的接着力ではない，一つの生命体として不断に新陳代謝をしつつも綜合・統合して個体として成り立たせている一種の力とでもいうべきものが作用しているからである。このような一種の力に例えられるものを，ここでは取り敢えず「凝集力」と呼んでおくことにする。

人の「集団」が，単にそこにある複数の相互には何らの関係性を持たない個体が恣意的偶然的にひとくくりにされたもの，すなわち「群れ」ではなく，各個体が相互の間に何らかの関係性があることの意識を有し，また各構成員がそれぞれの間に関係性を持とうという明瞭あるいは半明瞭の意識を有しているという精神的にも有機的な関係性を持つものであるならば，そこにはこれまた上述の類いの「凝集力」（生命個体とまったく同じものでもないことから，ここでは比喩的な意味で「類いの」としておく）が存在しているといえよう。

“烏合の衆”という言葉がある。確かにこれは人々が“集まって一つになっている”外観を呈してはいるが，それがいかに強大な外観を持ち，華麗な様相を示してはいても，その凝集性は脆く，まさに虚仮威しなものに過ぎず，まともな集団として看做されるよりも「群れ」に分類されるものである。その集合には集団に必要とされる恒常的な凝集力が缺如しているからである。

つまり，複数の個体が群れとしてではなく「集団」を形作っており，かつ崩壊や解体をせずに存在・存続できるのは，その集団内部に，即ち各集団構成員の間に一定の「凝集力」が恒常的に作用していることによる。

ここで「集団」と極めて抽象的にいってはみても，現実の集団には血縁を基礎にしたもの，地縁を基礎にしたもの，広義の文化を基礎にしたもの，宗教・思想・イデオロギーを基礎にしたもの，利益追求を基礎にしたもの，共同作業・行動を基礎にしたものなど，共同体的集団であるにせよ，また機能的集団であるにせよ，それぞれに多様な基礎をもっており，構成員の角度から見れば各自がただ一つの集団に属するのみならず，複数の集団に複合的に属しているし，各集団の角度から見れば，それぞれは構成員を共有し合っていることで複合的に絡み合っている。

また各集団を上位下位の位相あるいは階層からみれば，大まかにいって家族という単位から学校や会社・機関・団体さらには国家へという層をなしていると捉えることができ，さらには戦争の危険への対応，即ちできるだけ国家間の利害を調整していわゆる“平和”状態を維持し，それによってそれぞれの利益がそれなりに保証できるようにしたいという見地から，古代から集落間，都市国家間，領域国家間，押し並べていわゆる国家間の同盟や連合，現代では国際連盟や国連といった世界的規模で構成する疑似的集団や国際社会も作られてきた。さらに近年では地球環境の保全という見地から，これまで「人の集団」のみで世界を捉えてきた意識の視野が広がり，植物界や動物界までを含めた全地球の生命体を包括して一つの「集団」と看做して行こうという意識も顕著になってきている。

この世にはこのように多種様々な集団があるわけだが，もしある集団の基本的な特性を理解しようとするならば，その際には集団が集団として成り立つ上での各構成員の間に作用する凝集力，即ちその集団内部に存在し作用している凝集力についての問題が研究される必要があろう。その集団の凝集力はどのような個性的要素から構成されているのか，どのようにして維持されているのか，その質は如何なるものなのか等々，その凝集力の諸要素の側面と諸要素の「総合」ではない「綜合」のあり方が研究されねばならない。

また，ある集団の存在を維持し，そして存続させていこうとするためには，あるいは逆に崩壊させ消滅させようとする場合においても，この凝集力の問題は討論されねばならない。一般的にいえば，凝集力の不断の活性化と柔軟化が維持されていれば，外的および物理的な衝撃による物理的な消去がなされない限り，その集団の存在と存続は保証されるであろうし，それとは逆にその凝集力の枯渇化や硬直化が進行すれば，その集団の構成員の意識の如何に関わらず，崩壊や解体が進むのであり，その際には如何に外的な強制力を以て存続を図ろうとしても，自滅の趨勢と消滅という結末が招来されることは避けられない。

ここで注意を払わねばならないのは，集団の凝集力に求められる特性は「強固さ」であるというよりも寧ろ「強靭さ」というべきものである。そもそも集団の構成員が生きている人々であり，その生命活動は複雑巧妙な機械あるいは機器と同質ではなく，有機的な諸運動が基盤になっていること，そして集団としての諸営為は，最終的には人々の生命活動を如何に保障していくかに還元されるものである。まさにこの生命活動を基盤にし，そして生命活動に還元されていく過程そ

のものから生じる特性が，集団に求められる凝集力の充分な弾力性を持った強靭さとして特徴づけられるのである。非常事態におかれた集団が，その存続をかけてこれを克服していけるか否かは，その強固さにあるというよりもその強靭さに大きく依拠しているといえよう。そうあってこそ，その集団は危機への対応と克服とを通じてさらに一層の弾力性を増し，強靭さを手に入れることができる。

散漫で弛緩していると目される集団を確たる集団に再生しようと意図した場合，往々にしてその原因を構成員の怠惰や無気力に帰し，些末な規則や規定の拡充の方面に主力が傾注されてしまい，構成員に対する行動や思考のあり方をより強く規制することで管理統率者の自己満足と自尊が満たされ，一時的な“中興”が見られたとしても，集団としての崩壊の趨勢は逆により一層深化するということは縷々見受けられる事象であり，ここには強靭さと強固さとの質の違いが認識されていないという致命的欠陥がある。

集団が有効に機能していないことを一律に構成員の怠惰や無気力の所為にはできないのであって，構成員各自がその資質や能力に応じて，さらにはその水準を超えて刻苦奮闘はしているものの，その諸力が有効に「綜合」されていないことに起因している場合も常見される。そこから生じる疲労感と徒労感，即ち労多くして果少なし，あるいは頑張れば頑張るほど状況は悪化していくといった空漠の感覚は，結果として集団の凝集力を益々削いでいくことになる。これが国家や社会の規模で発生すると，その構成員間に将来への不安と現状に対する強い不満とが瀰漫し，やがてそれらは鬱積して刹那的な社会風潮として広がっていき，たとえその刹那的風潮に便乗した商業やサービス業は一時の虚華よろしく繁栄・繁盛を謳歌することはあっても，所詮は徒花であってその宿命たる凋落は避けられないのであり，国家や社会の崩壊に帰結せざるを得ない。

また，管理統率者の無能のみにその責を問い，いわゆる“首の挿げ替え”だけで問題が解決するとするのも浅慮に過ぎる。最初の管理統率者がどのように発生したかはひとまず問わないこととしても……つまり最初の統率者が統率者として就任できたことは，それ自体にその時点では集団に何らかの一定程度以上の凝集力が存在していたことになるわけであるから，細かくいえば，「馬上で天下を取れても，馬上で天下を治めることはできない」の故事の通り，問題はその就任以降の管理力・指導力・統率力が，構成員間のそして集団としての適切な凝集力を維持し健康に発展させることをなし得るかどうかに係わっているのであるから，……その後継者が集団内部での世襲や禅譲によるものであれ，あるいは，集団の外部からの邀請や簒奪によるものであれ，さらには構成員間で極めて民主的に選出された者であってさえも，その集団における一定の有効な凝集力の回復あるいは刷新に成功せねば意味がないのである。そこには管理統率者の人的力量としての能力と技量がその集団の構成員との協業に適切な可能性と実現性を有しているかが問題になるばかりでなく，他方，構成員側にも，少なくともその凝集力を再活性化し得るだけの潜在的な素質があることが前提されてなければならない。ここに管理指導者の適切な資質および能力と他の構成員の資質および能力が，諸力の寄せ集めとしての総合ではなく，有機的な“綜合”を通じてて凝集力を生み出していると把握される必要の所以がある。

大雑把ではあるが，このように集団が集団として成り立つ根拠を分析すると，そこには強靭な

凝集力があるのか，如何なる要素が凝集力を生み出してその集団を再生させ続けてているかが大きな鍵となっていることを理解できよう。そして凝集力は集団に内在するものであり，まさにそれが集団の内部で醸成されるものであって決して外部から注入できるものではないことにより，凝集力は集団の規模が大きくなるにつれ，また集団の内部構造が複雑になるに従い，管理統率者を含めた集団構成員全体による凝集力を維持し高めるための意識的かつ意図的な不断の努力が必要となっていることも理解される。

2．凝集力と「徳」

この集団の凝集力の問題について，本稿では我々が日々の生活をおくっている空間としての日本，その国家・社会および国民を前提にして討論を進めていく。

ここで一歩進んで凝集力を生み出す主観的契機について論を進めていく。まず，国家や社会は国民にとって単なる寄り合い所帯の集合ではなく，広域の共同体であるということがどの程度理解されているかが問われる。これは国家を内向きに見た場合である。まさにそれ故に，国家内での諸事は共同体内部の問題や課題として対応し，処理する原則が貫かれる。他方，少なくとも人類社会の現段階までの水準から見れば，現状では，国家は対外的には機能集団的に立ち現れているのであり，いわゆる国際社会での諸問題や課題は，国家という各機能集団がそれぞれの国益を如何に図り，実現していくかの観点から対応され処理されている。確かに近年では地球環境の危機問題を契機にして，地球上での人類および他の生命体が継続して生存して行けるようにするにはどうすればよいのかとの観点から，国際社会を国益確保と拡張の争奪の場から名実共に地球生命共同体へと転化させる必要があるとの主張がなされるようになってきた。この主張が今後どのように深化し，将来的に人類全体が真面目に地球共同体の実現を達成できるかどうか，誠に巨大な課題である。これはつまり，人類はその全体の規模で共同体としての凝集力を形成することができるかという課題である。

ある国家およびその社会が健全な凝集力を持っているかどうかは，その国民の意識に反映される。そして，国民がどのような国家観や社会観を抱いているかは，その凝集力がどのようなものであり，どのような程度のものであるかの指標となる。

国民がその日々の生活を通じて実感するところの国家あるいは社会に対する信頼感がどの程度のものであるかは，国政の如何を判断する上での一つの重要な焦点である。国民がたとえ現在の境遇や生活環境・条件に不十分さを感じてはいても，将来的に見て，自分たちの協業を通じてそれらの困難はやがて遠からず解決を見るであろうという予感や確信があれば，そこには国家や社会としての凝集力が維持されていると見ることができよう。しかし，国家や社会の運営のあり方に対して国民が不公平感や不公正感を抱き，将来に対して希望が抱けず，日々不安に苛まれるようであれば，凝集力は失われてしまったか，あるいは失われつつあるということを示している。つまり，国家や社会の崩壊が始まるのである。国民の中に生じる疲労感，徒労感，閉塞感，不公正感等々は，一方では国家や社会に対する無関心となって現れ，人心の荒廃や刹那的な人生観の蔓延へと展開されていくし，他方では閉塞感や不公正感の打破を目指した「正義の暴力」を標榜

し，かつこれを積極的に使用しようとする急激な国家・社会の変革運動が展開されるようになる。

もし国民同士が協業の意識で結ばれているのではなくて，本音のところでは相互に利用し合おうという意識で結ばれているならば，そこではいくら自己責任や自助努力が強調されても，既にその自己責任や自助努力の中身には如何に賢く他者を利用するかという計算・打算が織り込み済みとなっており，国民間の相互信頼は薄れ，常に損得勘定に基づいた人間関係が構築されることになるであろう。いわゆる殺伐とした人間関係の成立である。そこでは個人あるいは小集団の利益を獲得するための対象として，即ち国家や社会はその個人や集団に外在するものとして認識され，如何に賢く上手に国家を内側から蚕食していくかが最大の関心事となる。ここには国家や社会の凝集力を云々する余地は存在しない。

近年では郷土愛や愛国心，国民および国家の品格を糾そうとする声が広まっている。それは上昇期に見られるところのより良き明日への期待と抱負に満ちた明るさに裏打ちされたものではなく，まさにその反対の下降期に見られる怨嗟の響きを伴っている。

このような怨嗟の声は，政治家や官僚・官吏および各集団の管理統率者に向けられるだけではなく，国民の間にもお互いに不快の眼差しを向け合う場面が増えてきているようである。90年代以降，グローバル化時代の趨勢に合わない硬直化した諸制度の改革とか制度疲労を根本から改善するための改革が声高に叫ばれ，様々な改革がなされてきたが，怨嗟の声は小さくなるどころか益々大きくなっているようである。改革の度に信頼感が減って行く。世の中全体が，国民の資質や能力を含めて坂から転がり落ちつつあるような感覚は，否めない。

また混迷から脱却して再生を図るべきであり，その際に日本の歩むべき方向は「富国有徳」の道であり，国の上下をあげて人心の一新を図り，他国から尊敬される国家を創ろう，との呼び掛けもあるが，そうはいっても心情的には発奮の契機が掴めそうにもない。

従来の「仕方がない」という諦観は，日本人が不幸を乗り越えて次の一歩を踏み出す契機となり，消極的な外観とは裏腹の精神的な強靭さをも示すものであったが，それが“何とかなれば良いのだろうが，もうどうでも良い”にかわりつつあるのではないか。“何かがおかしい。しかし‥‥”。その感覚の根源には，凝集力の減退・衰退が潜んでいるようである。

近頃では世の中に不祥事が起きると，その関係部門の責任者たちが集団で謝罪会見を行うことが流行っている。そこでは既に紋切り型にしか聞こえない謝罪の言葉が流れ，それに対する被害者側は怒号を浴びせて土下座を強要する。傍目から見ると，双方ともに美しくない。

ただ，この謝罪の言葉の中に，たとえ紋切り型ではあっても，縷々“不徳の致すところ”という文言が挟まれることがある。その多くは管理統率責任者が不祥事の発生を予知し予防することができなかった場合，あるいは人災の場合や天災に起因する場合であっても，その被害の拡大を防ぐことができなかった際に，その管理統率の資質や能力がその本来負うべき責任責務を全うできなかったことを認めるという形で使われている。そして「不徳」の表明は管理統率の責任者からその組織や集団の外側と内側の双方に向けてなされる。

こうして見ると，不祥事や被害拡大を意識の側面からたどれば，究極のところ管理統率者の「不徳」がその集団の凝集力の弛緩と衰退を招く起因となった，という論理構造になっているこ

とがわかる。つまり，管理統率者の「徳」と集団の凝集力との間には，必然的ともいえる強固な関連性が存在しているということである。そして「徳」とはただ人気があることとか優しいこと，厳しいこととか礼儀正しいこと等とはまた一つ次元の異なるものであることが知られる。

3．「徳」という概念

「徳」という言葉は，今日の生活の場ではほぼ使われることはない。何か改まった場でようやく出てくる程度であるが，しかし日本語の中ではまだ完全な死語にはなっていないようである。その語は一般に漢字で表記され，「トク」と音読みされ，訓読みされることはない。人名に使われる場合や古訓では「のり，あつし，ただしい，のぼる，おくる，めぐむ，とる，あつかふ，さいはひ」などがあるらしい。

このように「徳」は我々にとって中国語に由来するというよりも「漢文」に由来する語であり，漢籍の伝来とともに持ち込まれた概念であり，湯桶読みや重箱読みには用いられない語である。日本文化の発明品である漢籍・漢文を読み解くための漢和辞典で「徳」の項目を引けば，「徳」字の用例は夥しく，ある種の感動を覚えるほどであるが，その中で現代日本語の中で比較的にまだ使われることがあろうと思われる語（特に音声で聞いてその語を思いつくもの）としては，徳行，徳性，徳望，悪徳，恩徳，功徳，公徳，人徳，仁徳，道徳，背徳，不徳，報徳，有徳くらいのものであろう。“徳用”は“徳用品”とか“お徳用です”等と使われ，「徳」義が含む“恵み”“利得”の意味から創られた和製語であり，“知育，徳育，体育”という場合の“徳育”（moral education：英）は，いわゆる和製翻訳漢語であり，また，「道徳」という語は本来は「道」と「徳」の2語，つまり「道・徳」であるが，それは斯界での基礎概念の一つになっている「仁義」（和製語）と同じく，本来は「仁」と「義」の2語であったものが「仁義」の1語に変化し，本来の意味とは少し異なった意味を持つようになったのに似て，「道徳」の1語に変化し，主にmorality（英）やmorale（仏）の訳語として一般化されたものであり，やはり和製語と思われる。

これらが和製語であるということから，もともとは大陸漢文化を特徴づける思想概念として発生し発展してきた「徳」は，ただ舶来品としての漢籍・漢文の中にのみ存在するのではなく，既に日本語および日本の観念や思想の中に一定の意味と地位を占める語になっているといえよう。

さて，先にあげた謝罪の言葉の中に現れる「不徳」そして「徳」は，仏教的あるいは道教的な意味合いで用いられてはおらず，儒教に由来を持つものとして儒教的に，つまり現世の世俗的な統治に係わる意味合いで使われており，そこでは「徳」は管理統率者個人の資質や能力に内在し，組織や集団の正常かつ健全な運営を保障するなにがしかの善的要素として用いられている。ここでの用法には，漢字語としての「徳」の本義に近い意味が現れていることは確かである。

このように不祥事の発生や人災，天災による被害の拡大は管理統率者の「不徳」により引き起こされるとするのは，漢代儒教の「天人相関論」[1)] を彷彿させるものがある。国家や社会の場において，今日のように不祥事や人災，天災が相次いで起きる度に管理統率者の「不徳」が意識されるとすれば，国家および社会は既に末期症状を呈していると儒教理論的には帰結される。まさ

に「天命」は「革」まろうとしているのであり，早晩に「禅譲」か「放伐」かが予想されることになる。

では他方の国民の側に見られる無気力，公共道徳の缺如，礼儀作法の衰退，ただただ目先の利益に目が眩んでの際限なき「利己主義」の主張，欲望の恣意的充足を求める姿勢，殺伐とした人間関係の蔓延等々は，儒教的に見るとどのように解釈できるであろうか。その根本は管理統治者の「不徳」の所為に帰すことはできても，本来ならば被支配者である民こそが有徳の管理統率者による統治を素直に受け入れ，ただその恩恵にあずかるばかりでなく，欲得に溺れて管理統率者の足を引っ張ったり心を煩わせることなく，進んで自覚的に自己を修練し，より聖人の域に近付こうと真っ当な努力をすべきである，ということになる。まさに朱子学儒教の「正心・誠意・修身・斉家・治国・平天下」,「格物致知」,「学びて聖人に至る」べしの主張である。

今日の国家や社会の状態を儒教的に表現するならば，“聖人君子はほぼ絶滅し，小人どもが恥ずかし気もなく大手を振って闊歩し，一億が総小人化したばかりか禽獣化しようとしている”，ということになろうし，そこから“子供を救え”という教育に関わる問題が展開されて行くことになる。上述した儒教的な「徳」概念はまだ我々の意識および観念の片隅にたとえ少々の埃は被ってはいても，確かに存在しているところに着目し，それに触発されて儒教の復活・復興・復権を言い出すことにも，一見合理性があるように見える。そして筆者には短絡的に見えるのであるが，いわゆる戦前の儒教的「修身」教育（筆者にはそれは多分に儒教的な粉飾を施したものではあっても，本来の儒教であるとは思われないが）の復活，道徳心や愛国心の涵養（その実は「灌養」）を行うなうべきだとする主張もなされるようになってきた。

儒教の経典に載せられた言葉や歴史上の儒者の大家たちによって残された言葉の中には，その字面を素直に追うと確かに感動や共鳴を呼び起こすものがある。しかし，そうだからといってもし本当に真面目に儒教を復活させ，その理念を真面目に実現しようとするならば，その結果は「葉公，龍ヲ好ム」[2] の憂き目を見るのが関の山であろう，というのが筆者の私見である。

4．なぜ儒教の復活・復興・復権は不可能であり，またそう試みるべきではないのか

儒教の視座から国家社会を分析してみるのは，確かにそれなりに一定の参考となる。なぜならば，総じて儒教が想定している国家や社会は一種の共同体であり，その理論の一部には傾聴に値するものがあるからである。しかし他方では儒教の伝統的な理想や理念，およびその理論を少々現代向きに加工した上でその思想体系ごと現代社会に適用し，実現しようとしても，無理であろう。

その限界性を示す主な理由のうちから５つを上げてみよう。

（１）儒教に伝承される「三代（夏，殷，西周の各王朝）」の盛時は，極めて美化され理想化されている。儒教は思想史的に見て比較的早熟の思想であるが，その理想社会を“神代の段階”のこととせずに，過去において確実にあった人の世の中のこととした。思想史上では，大昔とはいえ「太平の世」は確かにこの世界で実現されていたのであるから，たとえ人々から純朴さが失われた今日ではあっても，本当の努力さえ実れば「太平の世」を“再現”

できる可能性は絶無ではない，と人々を激励してきた。しかしいわゆる「三代」の理想社会は，20世紀以来の甲骨文資料の発見と研究，金文の研究そして考古学等の近代的科学に裏付けられた学問の諸成果が提示すところの批判には既に耐えられないこと，つまり従来は諸賢人の間に伝承され研究されてきた古代の文献上に記載されている情報自体の信憑性が失われたこと，そしてその実在したと確信する理想的「三代」の基礎の上に構築された思想の体系・構造が，実際には古代に託した観念上の理想的「三代」であり，多分に粉飾された虚構の上に構築された思想の体系・構造に過ぎず，空中楼閣化してしまったことである。これでは古の聖王や聖人の価値や信用度も半減せざるを得ない。

そうなると虚構であるが故に「三代」「太平の世」は再現するものではなく“創造”するものとなり，昔の人々がやれたのだから今日の我々も努力しさえすれば，という頑張りの契機が大きく損なわれてしまう。果たして今日の我々は，それでも古の聖王や聖人の言動に強い信頼を置き，敢えて科学的研究の諸成果を敬して遠ざけ，その伝承と教典によって構成される世界を希求して行くことができるのであろうか。

（2）儒教教典の中には（特に「尚書」や「周礼」など），その同時代から伝承されてきたものと看做すには無理のある後世の創作や改編が含まれ，いわゆる客観的な同時代資料として扱うことが困難になったこと。（多くは経典が自称する時代のものではなく，たとえいくらかの片鱗は留めているとはいえ，戦国末期や漢代のものも少なくないと見られている。）

（3）陰陽五行理論を内包することになった漢代以降の儒教であるが，その理論は特に朱子学儒教の宇宙論と人間論・政治理論とを貫いているが，早くは江戸時代の蘭学からの，そして明治期以降に本格化する近代科学の受容の過程で，陰陽五行理論の非科学的性格が明らかとなり，継続使用あるいは再興には無理があること。

（4）そもそも儒教の描く社会は，「徳」の理論を下敷きにしてそのレベルに基づいて「君・臣・民・夷狄」の4層の序列構造を想定している[3)]。それには更に男女の序列構造が絡んでいる。この構造を無視しては儒教の社会理論は成り立たないが，それでは今日に復活・復興・復権された儒教の中では，この階層序列をどのように適用しようとするのであろうか。

（5）儒教の正統性と正当性の根拠となる「華夷思想」は，中華至上主義と「徳化」という名目での無限の対外拡張の可能性とを肯定する要素を持つものであり，これは現在および将来の人類の共存・共生にとって極めて議論に値する問題である。しかしこの「華夷思想」を放棄してしまえば，儒教自体の正統性と正当性とがなくなってしまうのであり，これは儒教にとっては致命的な問題である。

以上の点から見ても儒教の復活・復興・復権には相当な無理が伴うことが理解されるであろう。

さて，このようなことが理解された上で，それでもなお敢えて儒教的なものにこだわろうとするのならば，残る手立ては次のようなものにならざるを得ないであろう。即ち，儒教の体系から美辞麗句を引き剥がし，それを装飾品として別な思想体系上に貼付けて儒教の仮装をし，それを敢えて現代に適応させた本物の儒教と強弁する道を歩むことである。そうなると誠に烏滸がまし

く，思想としては破廉恥の極みであるが，それで心理的な充足感が得られるのであれば，それはそれで面の皮を厚くして儒教を気取っていれば良いということである。勿論，仮装を引き剥がそうとしたり，本質を探ろうとする行為は厳禁されねばならない。そうなると同時に儒教の伝統である思想統制も復活させることができ，満足度は高まろうと思われる。だが果たしてこのような方法で国家や社会の凝集力が本当に再生されるのであろうか。そうとは思えないし，それどころか逆に内心での後ろめたさが増し，同時に偽善が横行することになるのではなかろうか。

このような換骨奪胎に抵抗を感じるというのであれば，儒教史そのままを全面肯定し，そこから標準的儒教を抽出し，いわゆる原理主義化するしかないであろう。しかし，我々は果たしてしてそのような儒教原理主義を歓迎するばかりでなく，現実にも耐えて行けるであろうか。

5．独自の思想体系を構築すべきではないのか

歴史を振り返れば，我々は古代から19世紀中葉に至る長期にわたって大陸の漢文化の思想に圧倒され，その代表的思想である儒教の権威を承認し続けてきた。またそれと平行して漢字は日本語の中に吸収され，日本語を構成する重要な要素となった。明治からの本格的な近代化＝西洋化の過程では，主な権威の対象を西欧思想へと鞍替えした。「和魂漢才」から「和魂洋才」への移行である。大東亜戦争期には「近代の超克」を意図した「和魂和才」の樹立が試みられたが，混迷のうちに終戦を迎え，雲散霧消した。敗戦以降は恰も「無魂米才」の様相を呈して今日に至っている[4)]。

近年，まるで噴出するかのように継起する社会問題の根底には，確かに国民の意識状態と深く係わる問題に繋がっているものがあるように見受けられる。さて，一体どうすれば我々は自分を取り戻し，未来を切り開いて行くことできるのであろうか。これは誠に重くて大きい課題である。これまでの「無魂米才」は既に意識の上では惰性化してしまっているようであり，さりとてグローバル化の掛け声に浮かされて自覚的にそれをより一層推し進めることにしたところで，課題の克服や未来の開拓に適しているとは到底思えない。

一頃は国際化の掛け声の下，“日本から世界に向けて情報を発信する”と息巻いていたが，一体何が発信できると思っていたのだろうか。発信するに値するものとは，第一にオリジナルかつ普遍性を有すると自信を持っている「真・善・美」を兼ね備えた思想文化の情報であり，二番煎じや二次加工品的な技術ではあるまい。

現代の日本語にとっては，普遍的な思想文化を生み出すには荷が重過ぎるのであろうか。それとも我々の能力には潜在的な問題があって，「真・善・美」を兼ね備えた普遍性を有する思想文化を創出することができないのであろうか。それとも我々には常に何かしら外圧が掛かっており，思想文化の創出が許されないようになっているのであろうか。

いずれにせよ今日の我々に必要とされているものは，「真・善・美」を兼ね備えた普遍性を有する思想文化であることは間違いないようである。そこから新たな道徳規範や価値観が形成され，諸技術の再評価と開発が目指され，矛盾した表現ではあるが“開かれた凝集力”が現れてくるような思想文化である。

本稿では「徳」の問題に少し言及したが，新たな思想の中ではその儒教性を乗り越え，純然たる日本語の概念として再定義し直し，それをただ管理統率者の持つべき属性としてではなく，国民全体が有する属性に再構築することを試みる価値はあるであろう。思想文化である以上，そこに用いられる諸概念は従来のものからまったく離れた珍奇なものであることはできないが，しかし旧来の諸概念の枠を超え，新たに積極的な意味付けを行い，そのことを通じて思想体系をも作り直し，発展させて行くことも可能なのではないか。

注

1）「天人感応・災異説」ともいう。先秦儒家の道徳的・人格神的な「天」と墨家の宗教的な禍福を下す「天」の思想が，陰陽家の「陰陽」説を仲介にして漢代に総合され，天と人との間には相互に陰陽の感応関係があり，天使の統治が順調・平常ならば人間界の陰陽の平衡が保たれるのに相関して天の陰陽の平衡も保たれているが，その統治に不備があればその程度に応じて人間界の陰陽の平衡が崩れ，天も人間界に相関して平衡を崩し，その程度に応じて災害や異変を下す，とする理論。代表者として前漢の董仲舒が有名。

2）前漢の劉向「新序・雑事篇」にある故事による。葉（地名）の公子である高は龍を酷愛し，家中に龍の絵を描いて悦に入っていたが，天上の龍がそれを知って高の家にやって来ると，高はその本物の龍の凄まじさに圧倒されて卒倒してしまった。

3）「臣民」の実態は「臣・民」であり，儒教における「臣」は統治階級に属する身分である。孔子集団の教育が目指したのは臣（特に陪臣）となる人材の養成であり，無位無官の純然たる被統治階級としての民の養成ではなかった。儒教は漢代から積極的に専制国家内部に編入されて行くが，そこでは臣僚として君主とともに民に対する支配階層を形成して行った。後世に科挙制度が確立すると，その臣と民との違いは一層はっきりすることになる。原則として民は国家に対する責任を持つものではなかった。

　日本の場合，明治期の「四民平等」により身分階級制が廃止され，臣（武士）・民（農工商）という2階級が「臣民」の1階級に統合され，これにより従来の民にも国家に対して積極的に責任を負うことが義務として要請された。武士の階級が廃止されたことは，一面では臣の民化であり，民（農商工）側から見ればその臣化であったともいえよう。これによって「臣・民」が「臣民」となり，日本は近代国家を支える基盤としての「国民」の枠組みを創ることができたのであり，天皇を君とした「君・臣民（＝国民）」という模式での国民の形成と統合が図られた。

4）「和魂漢才」からは日本的儒教（これが果たしてどこまで本来の儒教に即しているか，あるいは儒教の枠内に収まっているものかには議論の余地が多々ある）が生まれ，石門心学や国学も生まれてきた。そこには“我々＝「和」とは何か”，どうあるべきかという探求があったのではないか。「和魂洋才」にも当時の我々が置かれた強大な欧米からの圧力の下で如何にしてそれに対抗し，自立・生存を保つかという真摯な自己への問いかけがあったのではないか。確かにそれは将来の攘夷のための開国・洋化であったが，己を自主的自立的な存在として全うして行きたいという強い意識があったことは否定しようがない。このように「和魂」には自己を見つめ自立・自主を希求する契機が内包されている。「漢才」あるいは「洋才」，更には「洋才」の特化したものとしての「米才」は，これを単なる技能や技術と見るわけにはいかない。一定の技能や技術にはそれに応じた一定の思想や価値観が内在しているのであり，「和魂漢才」や「和魂洋才」といった場合には，「才」に内在する思想や価値観（今日流にいえば「〜スタンダード」であろう）と対峙しつつも，その彼我の矛盾を乗り越えつつ我を更新して行くという「和魂」の探求があったのではないだろうか。もしそうであるならば昭和20年の夏以降の我々は，あるいは少なくとも昨今の我々は，この「和魂」の探求をどれだけ真摯に，深く行ってきたであろうか。

参考文献

（1）儒教・中国古代思想史および中国古代史関連
・「尚書」「十三経注疏」本　中華書局　1980年
・「論語」（「論語正義」本）「諸子集成」　中華書局　1954年版
・「墨子」（「墨子閒詁」本）「諸子集成」　中華書局　1954年版
・「孟子」（「孟子正義」本）「諸子集成」　中華書局　1954年版
・「荀子』（「荀子集解」本）「諸子集成」　中華書局　1954年版
・「春秋繁露」董仲舒（「春秋繁露義證」本）「新編諸子集成」（第１輯）　中華書局　1992年
・「四書章句集注」朱熹　「新編諸子集成」（第１輯）中華書局　1983年
・「史記」司馬遷　中華書局　1959年版
・「漢書」班固　中華書局　1962年版
・「朱子学と陽明学」島田虔二　岩波新書（青）1967年
・「殷虚卜辞綜述」陳夢家　科学出版社　1956年
・「金文通釈／１～７」白川静　「白川静著作集／別巻／９～17」　平凡社　2004～05年
・「殷文札記」白川静　「白川静著作集／別巻／18」　平凡社　2006年
・「甲骨文と殷史」白川静　「白川静著作集／４」　平凡社　2000年
・「金文と経典」白川静　「白川静著作集／５」　平凡社　2000年
・「神話と思想」白川静　「白川静著作集／６」　平凡社　1999年
・「神話から歴史へ……神話時代　夏王朝」宮本一夫　「中国の歴史／01」講談社　2005年
・「都市国家から中華へ……殷周春秋戦国」平勢隆郎　「中国の歴史／02」講談社　2005年
・「古代中国……天命と青銅器」小南一郎　「諸文明の起源／５」　京都大学学術出版会　2006年
・「中国青銅時代」張光直／小南一郎・間瀬収芳　訳　平凡社　1989年
・「夏王朝……中国文明の原像」岡村秀典　講談社学術文庫　2007年
・「古代殷王朝の謎」伊藤道治　講談社学術文庫　2002年
・「中国哲学思想史上的『聖』的起源」窪田忍　「学人」第１輯　江蘇文芸出版社　1991年
・「中国聖人論」王文亮　中国社会科学出版社　1993年

（2）近代社会・近代化の思想，日本語関連
・「富国有徳論」川勝平太　中公文庫　2000年
・「国家学のすすめ」坂本多加雄　ちくま新書　2001年
・「国家についての考察」佐伯啓思　飛鳥新社　2001年
・「『欲望』と資本主義」佐伯啓思　講談社現代新書　1993年
・「アダム・スミスの誤算」佐伯啓思　PHP新書　1999年
・「ケインズの予言」佐伯啓思　PHP新書　1999年
・「20世紀とは何だったのか」佐伯啓思　PHP新書　2004年
・「恋愛と贅沢と資本主義」ヴェルナー・ゾンバルト／金森誠也　訳　講談社学術文庫　2000年